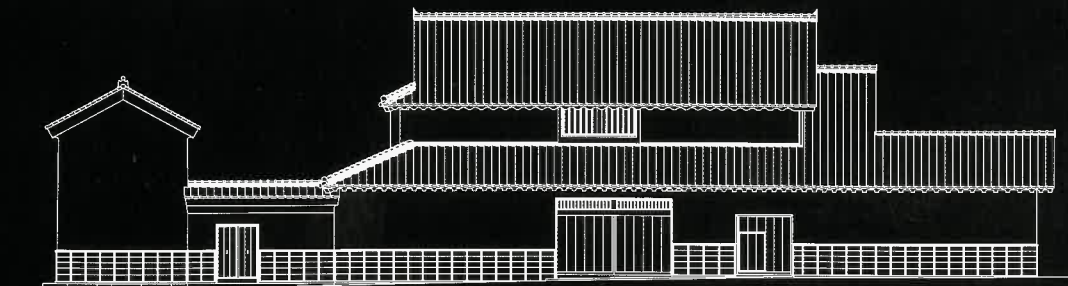
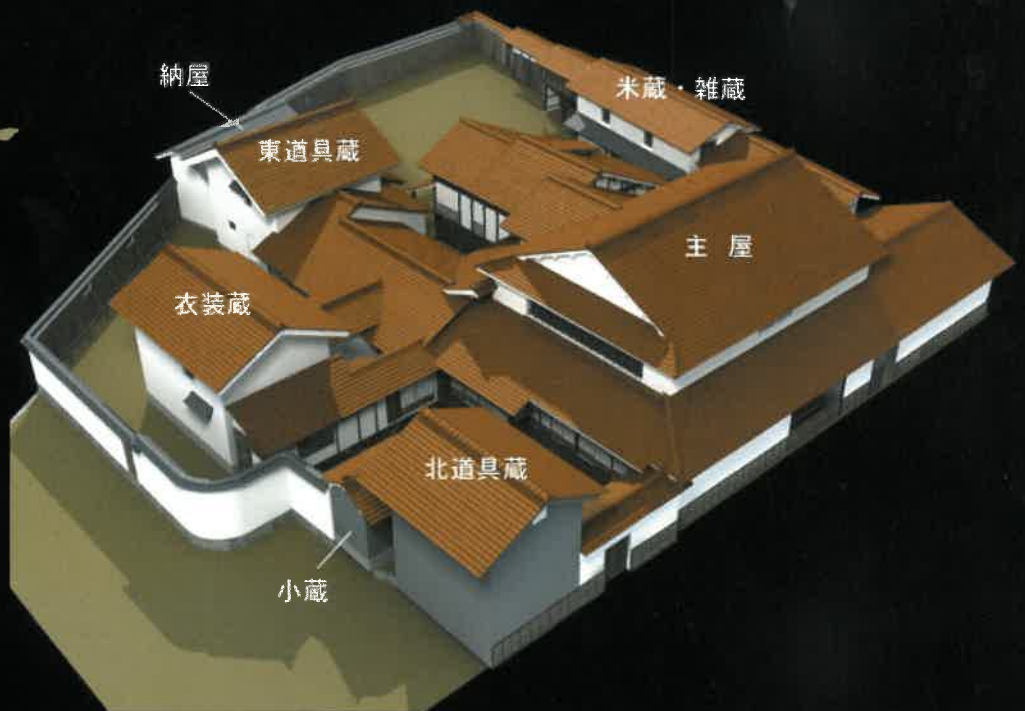


島根県教育委員会  
大田市教育委員会  
温泉津町教育委員会  
仁摩町教育委員会

平成17年(2005)3月

# 遺跡総合調査概報 5

— 港湾集落・石造物・古文書文献・町並み保存地区調査 —



上：重要文化財熊谷家住宅復元図  
下：同住宅正面図

幕末から明治初年の姿に復元！ 完了間近い重要文化財熊谷家住宅保存活用事業  
平成13年末の着手から約4年、延べ約18,000人の手による復元工事が今年の夏完了します。  
その後、公開活用に向けて整備工事を引き続き行います。開館は平成18年春の予定です。

Iwami Ginzan

# 石見 銀山



# 港湾の集落調査

この調査では、平成14・15年度に行った石見銀山街道調査の成果を踏まえながら、銀及び銀鉱石の積出港であった「鞆ヶ浦」と「沖泊」という二つの港の、集落も含めた港湾全体の土地利用のあり方やその歴史的特色を明らかにするために、地質・地形、民俗、石造物、古文書・文献、発掘、建造物などの総合的な調査を実施しました。

## 二つの港湾の特徴

鞆ヶ浦は、石見銀山遺跡の銀山柵内から北西に約6km、沖泊は西方に約9kmほどの位置にあり、ともに両岸に急崖が迫った幅の狭い湾です。仁摩から温泉津にかけては、海岸線が複雑に入り組んだリアス式海岸で、海浜はあまり発達していません。両港は形状・規模がよく似ており、いずれも西に向けて日本海に細長く開き、鞆ヶ浦には鶴島、沖泊には鷗島が湾口の北にあって自然の防波堤の役目をし、北～北西の波浪を受けにくくなっています。

## 鞆ヶ浦集落

鞆ヶ浦は、慶長5年（1600）の史料に「ともがいわや・まじ・古龍釣役（漁業への課税のこと）」とあって、このころまでにすでに漁村化していることがわかります。近代の開発の影響も受けなかったことから、大きな地割りの変更は近世初頭以降行われなかったものと考えられています。

集落は水路に沿って傾斜のある街路とその両側の階段状の屋敷地からなっています。

その多くは前庭と作業土間、納屋を作業空間として持っており、土蔵のある沖泊とは異なっています。これは鞆ヶ浦が漁業と農業を主たる生業とした集落へと変遷したためと考えられます。狭隘な谷間に狭小な敷地という空間利用がこの集落の最大の特徴です。



鞆ヶ浦の集落（狭い街路を挟んで家屋が建ち並ぶ）



鞆ヶ浦の湾



同上（正面にある島が鶴島）

## 沖泊集落

沖泊の集落は史料によると、慶長10年（1605）には20筆の宅地が、元禄5年（1692）には26筆の宅地が記録されています。この間の6筆の増加は分筆によるものであり、基本的な地割りは慶長期と変わっていないことがわかります。その後、明治9年（1876）には99筆となり、2倍以上になりましたが、発掘調査などによってこの造成は幕末ごろのことと推定され、近世初頭以来の地割りの変遷を読み取ることができました。現在の地割りは幕末の造成を最後まで踏襲されていると考えられています。

集落は水路と2本の街路によって区分された3列の屋敷地からなっています。崖を切り出して地割りを整え、石列や石積みによって建物の敷地を区画しています。

屋敷地には主屋に土蔵を併設するものと、主屋のみのものがみられます。また、建物を詳しくみると、農家型の特徴を備えながらも、町屋の特徴も併せ持っていることがわかります。かつてこの集落は、廻船業や廻船問屋を営むなど、海運業を主要な生業としていたことが知られており、土蔵の併設などがこのことと関係していると考えられます。



沖泊の集落（水路・街路を挟んで家屋が建ち並ぶ）



集落の奥にある共同井戸



沖泊の集落



沖泊の湾（両岸に船を繫留するための鼻ぐり岩が多くみられる）



# 石造物調査

石造物調査では、平成9年度から銀山柵内における分布調査を毎年継続して行ってきました。また、11年度からはこれと同時に特定の寺院墓地などを対象にした悉皆調査を行ってきました。分布調査は14年度にこの範囲がほぼ終わり、翌15年度には隣接する大森地区の調査も行いました。この結果、銀山柵内は6,000点以上、大森地区では5,000点以上の石造物が確認されました。一方、悉皆調査は宗派や立地などを考慮に入れながら、4年間で寺院墓地6カ所をはじめ、歴代奉行代官・地役人等の墓地を調査しました。

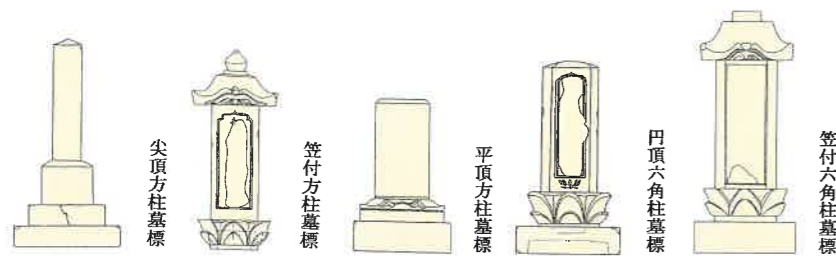
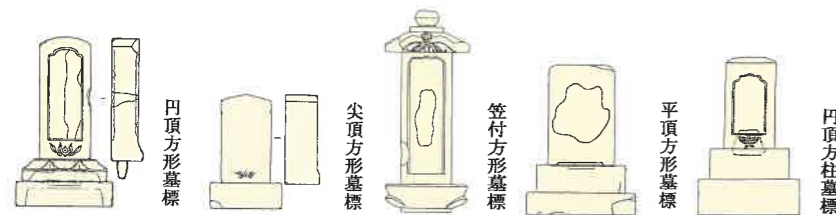
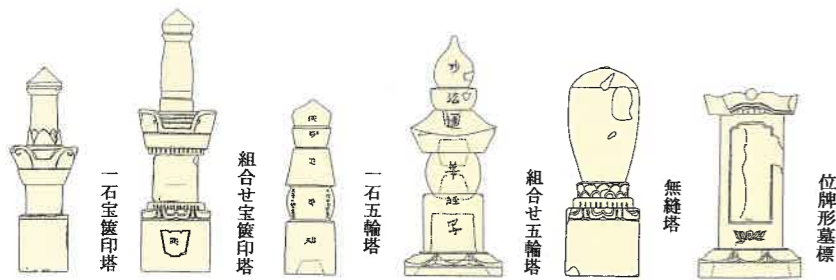
16年度は、今後の石造物調査のあり方を展望すべく、分布調査の結果と悉皆調査から得られた成果を調査報告書にまとめることにしました。



調査部会での検討風景（平成16年度、第2回の部会から）



分布調査の実施風景（大森地区、大首寺墓地にて）



銀山柵内における墓石型式

## さまざまな形の墓石とその変遷

石見銀山遺跡では、さまざまな形をした石造物を見ることができます。墓石だけを見ても21もの型式に分類できます。大きくは二つの種類があり、一つが一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔などと呼ぶ塔形を呈するものであり、もう一つが円頂方形墓標、尖頂方柱墓標、位牌形墓標、笠付方形墓標などと呼ぶ方柱状のものです。

この他には、子供の墓として特徴的な地蔵の像容を表したのものや、変わった形のものでは隠れキリシタン関連の遺物かとも想定される特殊な墓標も見つかっています。

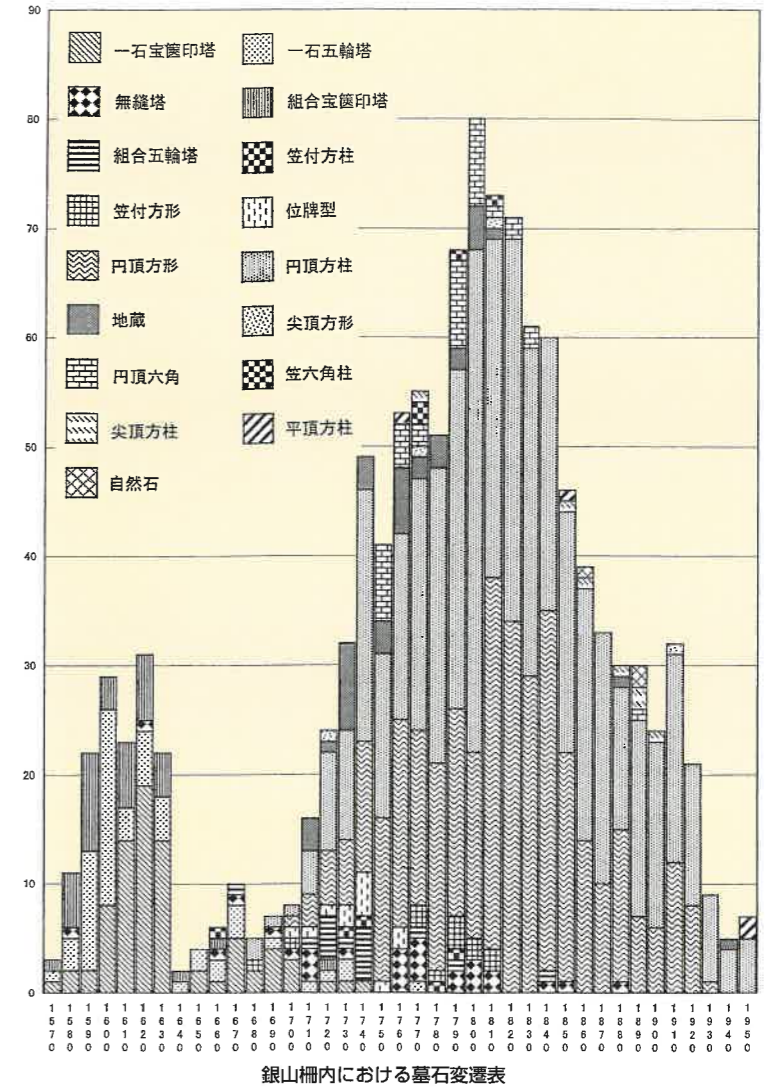
調査によって、これらの墓石のほぼ全てが銀山柵内から西方に9kmほど離れた温泉津町福光に産する凝灰岩が使用されていると判明しました。また、これらには造立年代が記されたものが過半数もあり、先に分類した墓石の変遷を知ることができるとともに、石見銀山が地域色豊かなところであったことなども分かりました。

石見銀山では前半期のうちに、一石宝篋印塔と一石五輪塔が主体をなしている特徴があります。しかも前者は後者の1.5倍にも達する数が確認できます。このように中世末期に遡って一石宝篋印塔が主体となる事例は、いまのところ石見銀山以外にはなく、極めて地域色の強いところと言えます。この現象は17世紀代まで続きますが、それ以降になると、今度はこの時代に定型化した方柱状の墓標に変わっていくのがよく分かります。

また、墓石の変遷表をみると、造立には1600年前後と1800年前後に二つの大きなピークがあることが分かります。こうした推移には石見銀山における人口動態が間接的ながらも反映されているものと考えられます。



仙ノ山・石銀地区の墓地



銀山柵内における墓石型式別変遷表



# 古文書文献調査



周辺地域の調査風景（江津市桜江町大貫の中村家にて）

古文書文献調査団では、平成15年度までの調査の成果と方針を引き継いで、石見銀山・石見銀について、また、周辺地域・隣接する諸鉦山との技術的、経済的、社会的関係について調査を行いました。

16年度は、特に島根県内の調査を重点的に行うとともに、これまでの古文書調査の成果の一つとして、山中家文書に収録されている石見銀山附地役人62人分の由緒書について翻刻し、資料集を作成しました。また、海外調査についても中国関係史料・文献を中心にこれまで収集した史料の翻訳、分析などを継続しています。さらに、「石見銀山歴史資料検索システム」（データベース）についても、データの入力・蓄積を引き続き行っています。

## 中原家の文書調査

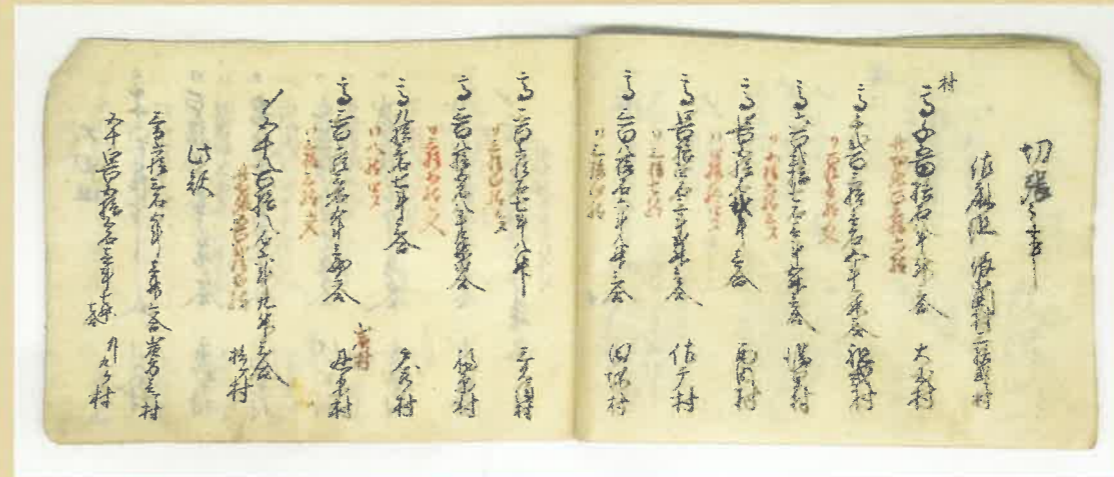
県内の調査では、これまで銀山の経営や支配に関わる古文書の他に、銀山周辺に残る地方文書の調査を進めてきました。今年度は昨年度の予備調査を踏まえ、邑智郡美郷町中原義治氏宅の所蔵文書について実施しました。

中原家は代々旧邑智郡潮村の村役人を勤めた旧家であり、農業の他に製鉄業、酒造、水運業など、多角的な経営を行っていました。そのため同家の文書には、旧潮村の村政に関わる文書の他に、鉦大勘定帳や船賃帳など、中原家が経営した鉦製鉄や水運業等に関係する文書も多く含まれています。これらは、江戸時代における江川流域の諸産業のあり様をうかがうことのできる貴重な文書といえます。



明治7年（1874）「借区開業製鉦願」

潮村字ニタ郷に、鉦場の設置を依頼した際の願書の写し。この場所には現在中国電力の発電所が建設されているため往時の姿は失われています。絵図によると、中央に高殿が配置されているほか、できた鉤を水冷するための鉄池、従業員長の長屋などがあったことがわかります。

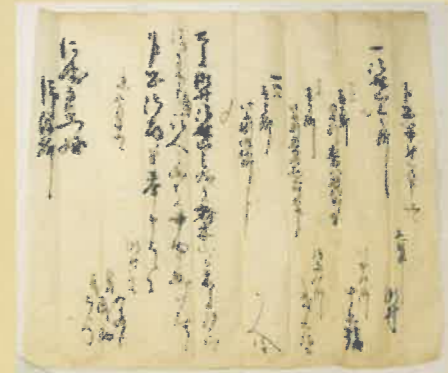


安政2年（1855）「石見国・石州銀山村々廻状順録」

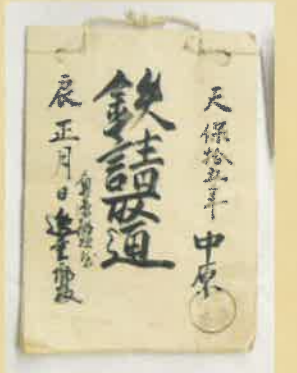
江戸時代には銀山周辺の32か村を「御田村」（おこいむら）に指定し、坑道内で使用される木材（切張）や銀製錬用の木炭など、銀生産に必要な諸資材の供給を村方に命じました。御田村に指定された村々では、この史料にみえるように、おおよそ村高100石につき切張9駄ほどの割合で代官所に供出するようになっていました。

この史料は、邑智郡潮村（現同郡美郷町潮）にある二郷山と今山の御林（幕府所有林）を、当時は川本村十郎兵衛と浜原村幾六が請け負っていたことを代官所に報告したものです。この両者ともに、当時の有力な鉦師でした。

銀山領内の有力な鉦師は、年限を限って御林を借り請け、そこで製鉄用の木炭を生産しました。その際、所定の運上は、銀納分の他、一部を木炭の現物で納めることになっていました。上納された木炭は、銀山での銀製錬に用いられました。



宝暦13年（1763）「請負鉦師一札」



天保15年（1844）「鉄請取通」

また、銀山関係では、御立山（幕府所有林）から銀山へ公納された銀吹炭の駄数や、御田村への切張（坑木）の割賦方法、さらには銀輸送の際の助郷といった、銀山と村方との関係を具体的に示す文書もあり、これまでの文書情報にはない具体的な知見を得ることができました。

今後は、特に鉦製鉄と銀山との関係について、先に収集した経営帳簿等の分析によって明らかにするとともに、残された文書についても継続して調査を行う予定です。



古文書文献調査団の検討会議風景（島根県立博物館にて）



# 町並み保存地区の調査

(大森銀山重要伝統的建造物群保存地区)



修理前の正面外観（明治中期の創建と推定されます）。



修理後  
痕跡に基づき、失われていた雨戸・戸袋を復元し、玄関の間口もかつての幅に復元しました。



桁に残されていた戸袋の痕跡と一筋鴨居（雨戸のレール）。



近隣の住民への聞き取り調査。

平成16年度、大森町の町並み保存地区では町屋5棟分の保存修理を行いました。今回はそのうちの一つ、昭和区にある荒田家の保存修理の例です。

荒田家はかつて豆腐を作り商っていましたが、空き家となって以降現在は地元の方々により昭和区自治会館として活用されています。

道路に面して2階建ての主屋、背後に作業場などが配されていますが、その取り合い部分で瓦の葺き乱れによるひどい雨漏りをおこしていました。そのため屋根替えと土壁の塗り替え、建具の復元が今回の主な修理内容です。

解体途中の痕跡や聞き取りから、かつて玄関は非常に狭かったことが分かったため当時の幅に戻すことにしました。また、現状で失われていた1階および2階の雨戸・戸袋を痕跡により復元しています。